

## 重症児病棟だより（そよかぜ通信）によせて

この度、国立病院機構宇都宮病院院長を拝命しました田中孝昭です。私は平成13年7月に慈恵医大から赴任、今年で19年目になります。専門は整形外科ですので重症児病棟には骨折などの外傷の処置でときどき行きますが、その多くは立てないため骨密度が低下し、いわゆる骨粗鬆症になります。

1986年から2007年までの22年間に入院中の重症心身障害児・者に生じた骨折について検討を行いました。その結果、骨折が判明したものは17例、18骨折で、1年間に骨折を起こす危険性は1.02%でした。重症心身障害児・者における骨密度は廃用萎縮により著しく低下しており、高齢者にみられる骨粗鬆症性骨折に類似していますが、骨折部位は大腿骨、上腕骨の骨幹部が多く、関節拘縮が大きく影響していることが示唆されました。

近年の医療技術の進歩により重症児の高齢化がみられ、特に50歳以上の方には骨密度を測定しています。印象としては、昔と比較して骨折の頻度が増加しているのではと思っております。現在、骨折、骨密度の結果を検討しており、今後の治療に役立てたいと考えております。

また現在、新型コロナウイルス感染症という、新たな困難を抱えています。職員一丸となってこの難局を乗り越え、地域からのさらなる信頼を得られる病院を目指すつもりでおります。